77 明治9年12月20日　菊池長閑宛

第十六号十二月廿日　（長閑注記）

第十号十一月三日附尊書去ル十五日落手セリ博覧会記行御慰に成りし由満足之至なり熊本騒きも落着たるとの新聞にて安心セリ即今日増に雪降積田舎の景色殊によし町も田舎も車ハ止て橇を用ゆ併音ハセぬ故馬の首に鈴を付ちん〳〵ちり〳〵の音にて人除をするハ当地の風俗なり右橇乗ハ冬時の楽みなり二十五日ハ邪蘓（ママ）の誕生日にて邪蘓（ママ）教国一般の休日なり此日ハ日本の歳暮か年始に能似たる日にて互に贈り物をする日なり夫故店々ハ殊の外賑はいて買物人ハ市中に群集する事夥し寒気ハ殊に厳なり四五日前抔ハ零度下六度の寒さなりし其様な日にハ面顔感覚を失ひ磨（コス）りて見ても一向自分の顔の様に思はれす頓と北海道に留学した心持なり御祖母様の御湯治は御相応との事にて大慶至極此地にハ湯治場と云ふ物一切なし西南諸州にハ侭温泉ある由去月末より今日迄英麿公当地に出懸られ当家に御止宿にて三人にて随分面白き日を送たり然し信方君も私も休日てハ無つた故昼の内ハ英公余程淋敷御暮しと見得たり三人写の写真をする積の所其義ハ果さす残念なり先此度ハ此切にて筆を閣へし

御尊父様　　武夫拝

（長閑注記）
「丑一月三十一日達
二月一日返事第二号ヲ以宅命江托し出し」